



## 吉光尼 篇

### 親鸞の母、宇陀に眠る

親鸞は、鎌倉時代の僧で、浄土真宗の開祖とされています。法然ほつねんの念仏の教えに出会ってからは、法然を生涯の師と仰ぎ、その教えを広めました。法然の教えには、親鸞だけではなく、身分を問わず、多くの人々が帰依きえしました。しかし、他の宗派から強い反発を受け、朝廷が法然や親鸞たちの弾圧に踏み切り、法然は土佐（現在の高知県）、親鸞は越後（現在の新潟県）へ流罪となりました。親鸞、35歳の出来事でした。5年後、流罪が許された親鸞は、関東などで念仏の教えを広く伝え、のちに京都へと戻ってきました。

この親鸞は、承安3（1173）年に貴族の日野有範ひのありのりの長男として京都で生まれました。母については、江戸時代の書物のなかで「吉光女きっこうにょ（貴光女）」と伝えられています。親鸞を授かる際に、光が口から入り、如意輪観音が訪れる夢をみたというエピソードも記されています。

吉光女は、親鸞が越後へと流罪となったとき、世をはかなみ、侍女じじょ（身のまわりの世話をする女性）の案内によって侍女の郷里である向渕（現在の室生向渕）に隠れ、この時に剃髪し、尼になったといわれています。これが「吉光尼きっこうに」のはじまりとなります。

その後、井足（現在の榛原上井足）に移り住み、ここで生涯を終えたと伝えられています。ここ、上井足には、「吉光尼」の墓と伝えるところがあり、今も訪れる人が絶えません。また、向渕にある正定寺は、「吉光尼」ゆかりの寺で、境内にはスズランが美しく咲きます。

